

若い息吹を熊本から！

構造家・黒岩裕樹

朝倉幸子◎TH-1
illustration:Taco

■ミレニアル世代

1980年生まれの黒岩裕樹さんは、これからの構造界を担う人のオーラがある。母方に設計事務所があったとはいえ不景気な頃だから建築の道に進むのは反対された。だがしかし、感性の赴くままに琉球大学へ進学して環境建設工学科を卒業した。学校で構造家の池田昌弘さんの講演を聞いて構造家という職能を知り、大いに影響を受けた。池田事務所でアルバイトをしていたとき、佐々木陸朗構造計画研究所から独立した構造家の鈴木啓さんが初めてのスタッフとして採用してくれた。密な指導をしてくれた鈴木さんへの感謝は尽きない。

黒岩さんいわく「虫食いの状態の構造の知識」を埋めるために退所して、九州大学の大学院に進み、黒岩構造事ム所も開設した。ちなみに社名を「事ム所」としたのは、難しい漢字の羅列を避けた方がいいという母親の意見を採用している。福岡から熊本に事務所を移したのは、依頼される設計が多県に渡るので仕事はどこでもやっていけると判断してのこと。これも感性が強くて判断の早いミレニアル世代の黒岩さんならではの。熊本大学で後期博士課程を終え工学博士となる。

■神水公衆浴場

2016年に熊本震災で被災し、自宅マンションも大規模半壊する。建築構造家として応急危険度判定などのボランティアに力を入れる中から、デスクワークの構造設計や施工現場の中では掴めない現実の問題に直面した。それが黒岩さんの構造家としての立ち位置をつくったようだ。自宅を建てる計画に社会貢献できる施設を入れるこ

とにしようと考え実行に移す。無謀にも思える銭湯を開業したいとの想いから、単に水の豊富な地域だからとイメージしたのではなく、地域に明るい交流の場を提供したかったという。かつ、黒岩家には4人姉妹の子供たちがいて、まとめた入浴にも都合がよかったのだと笑う。妻ヒロ子さんも構造設計者として第一線を担っている黒岩さんの片腕なので、一番の理解者なのでした。「今後、仮に被災してこの銭湯で知り合った人たちが避難所で会うことになったとしたら心強いと思う」と、深い読みを語っている。大反対だったご両親は今では番台に座ることもある。二人にとっても地元につながりをもてるよき場となっているようだ。高齢化社会へのプレゼントがこの銭湯かもしれない。

■JSDC賞受賞

建築雑誌にも取り上げられた(本誌2022年9月号)自宅と事ム所の1階にある銭湯「神水公衆浴場」がオープンしたのは2020年でした。意匠設計は西村浩さん(ワークヴィジョンズ、竹味佑人建築設計室)が担当した木造建築で、屋根はCLT積層アーチで内部にも美しい形を提供している。工事費の削減には苦労したそうだが、分離発注と子供の頃からの友人たちの力も借りて凌ぐことに成功したようだ。

日本構造家倶楽部が主催する2022年第17回日本構造デザイン賞を受賞した。アトリエ的な仕事をした黒岩さんが評価されたことは喜ばしい。授賞式の行われた同日のインタビューだったが、会長の金箱温春さんと親しくお話しできたと興奮気味に話してくれた。帰り道、その黒岩さんの姿が実に初々しいと覇志堂と語り合ったのでした。

九州大学でも講師を始めた黒岩さんだが、地元熊本大学や琉球大学で教鞭を執るのも間近だろう。他の同世代の構造家で東京から離れている人も出ているが「むしろつながるようになった」と語る構造家黒岩裕樹さん。優秀な女性技術者に囲まれた事ム所と銭湯の経営者なのです。追伸、最高の父親でもあります！

